

日本は戦争をするのか—集団的自衛権と自衛隊

表題と写真は東京新聞編集/論説委員半田滋さん執筆の岩波新書のタイトルである。集団的自衛権の行使容認の閣議決定前の2014年5月に刊行された。表紙カバーは著者撮影のイージス護衛艦「こんごう」である。長年日本の防衛問題取材してきた著者による「渾身の一冊」であり、緊迫する事態を考えるうえで再読した。

本書冒頭から。「日本は戦争をするだろうか。安倍晋三政権が長く続けば続くほど、その可能性は高まるといわざるを得ない。憲法9条を空文化することにより、自衛隊が国内外で武力行使する道筋がつけられるからである。」残念ながら、日本が戦争をする危険性はこの1年で格段に高まった。日米防衛協力のための指針(ガイドライン)が18年ぶりに改定された。その日は沖縄で「屈辱の日」といわれる4月28日である。1952年4月28日は、サンフランシスコ講和条約が発効し、日本は占領から主権を取り戻したが、沖縄などが米国統治下に残された日だ。

本書は次の6章からなる。1 不安定要因になった安倍首相、2 法治国家から人治国家へ、3 安保法制懇のトリック、4 「積極的平和主義」の罟、5 集団的自衛権の危険性、6 逆シビリアンコントロール。本書はじめに、6章の最後だけを紹介しよう。

「戦後レジームからの脱却」によって現れるのは「新しい、みずみずしい日本」などではない。「古くて、二度と戻りたくない戦前の日本」なのである。本書は、安倍政権が憲法9条を空洞化して「戦争ができる国づくり」を進める様子を具体的に分析している。法律の素人を集めて懇談会を立ち上げ、提出される報告書をもとに内閣が憲法解釈を変えるという「立憲主義の破壊」も分かりやすく解説した。憲法解釈が変更され、集団的自衛権が行使容認となれば、将来、起こるかも知れない「第二次朝鮮戦争」で何が起こるのかを自衛隊の極秘文書を基に詳細に記した。米国から「強固な国粋主義者」と呼ばれる首相の驕り、勘違いの数々と、憲法の枠内で頑張る自衛隊の活動との落差も知ってほしい。自衛隊の中に潜む、首相と共通する心情が目覚めかねない危険も書き込んでいる。

自衛隊が暴走せず、むしろ自重しているように見えるのは、歴代の自民党政権が自衛隊の活動に憲法9条のタガをはめてきたからである。その結果、国内外の活動は「人助け」「国づくり」に限定され、高評価を積み上げてきた。政府見解が変われば、自衛隊も変わる。冷戦後、国内外の活動を通じて力を蓄えた自衛隊を活かすも殺すも政治次第である。

(2015年5月2日)

